

日本赤十字九州国際看護大学/Japanese Red

Cross Kyushu International College of

Nursing

カルガリー家族看護モデルを用いた家族インタビューのロールプレイ演習の効果：  
看護師の認識の変化に対する分析

メタデータ	言語: Japanese 出版者: 日本赤十字九州国際看護大学 公開日: 2013-01-17 キーワード (Ja): カルガリー家族看護モデル, ロールプレイ, 家族インタビュー キーワード (En): 作成者: 佐伯, あゆみ, 石松, 直子, 山根, 理恵子 メールアドレス: 所属:
URL	<a href="https://doi.org/10.15019/00000129">https://doi.org/10.15019/00000129</a>

# カルガリー家族看護モデルを用いた家族インタビューのロールプレイ演習の効果 ～看護師の認識の変化に対する分析～

The Effect on the Calgary Family Nursing Model for the Family Interview using the Role Playing  
- Analysis of the change of recognition of nurses -

佐伯あゆみ<sup>1)</sup> 石松直子<sup>2)</sup> 山根理恵子<sup>3)</sup>  
Ayumi Saeki, Naoko Ishimatsu, Rieko Yamane

日本赤十字九州国際看護大学<sup>1)</sup>  
The Japanise Red Cross Kyushu International College of Nursing

西岡病院<sup>2)</sup>  
Nishioka Hospital

福岡赤十字病院<sup>3)</sup>  
Fukuoka Red Cross Hospital

## 要約

本研究の目的は、看護師に対するカルガリー家族看護モデルを用いたロールプレイ演習の効果を明らかにすることである。研究方法は、看護師の自主的な勉強会においてカルガリー家族看護モデルを用いて家族インタビューのロールプレイ演習を行い、ロールプレイ演習に参加した看護師の認識の変化と、ロールプレイ演習後の感想を分析した。ロールプレイ演習は、カルガリー家族アセスメントモデルの家族を理解する多角的な視点を具体的な質問へと発展させていく過程に効果があり、ロールプレイ演習に参加した看護師は自己の家族インタビューを行う技術が向上したと認識していた。又、カルガリー家族看護モデルを臨床での活用へと発展させることができていた。しかし、家族への介入段階のインタビュー技術には十分な効果がみられず、今後、介入技法としての家族インタビュー技術を高めるための取り組みを検討していく必要性が示唆された。

Key Word : カルガリー家族看護モデル ロールプレイ 家族インタビュー

## I はじめに

カルガリー家族看護モデルは、システムとしての家族を理解するのに有効なモデルである。しかし、これまで我々が行ってきた看護師の自主的な勉強会において、カルガリー家

族アセスメントモデル（以下CFAM）とカルガリー家族介入モデル（以下CFIM）を学んだだけでは実践にいかせず、家族インタビューを行う技術が必要であるという課題が残った。臨床では、家族インタビュー技術を培う為に客観的な他者評価・アドバイスを受ける機会はほとんどない。そこで、森山<sup>1)</sup>が家族インタビューのトレーニング方法として紹介しているロールプレイに注目した。看護師のコミュニケーション技術を発展させる学習方法としてロールプレイが有効であるということはこれまでに多く研究されている。<sup>2) 3)</sup>本研究は、カルガリー家族看護モデルを用いた家族インタビューのロールプレイ演習の効果を、演習に参加した看護師の認識の変化とロールプレイ演習後の感想から明らかにし考察したものである。

## II 用語の定義

ロールプレイ演習：ある役割を仮定して演じてみる役割演技のことである。本研究ではカルガリー家族看護モデルにおける家族インタビューの展開方法として初回アセスメント、二次アセスメント、介入のプロセスを事例にそって、看護師、患者、家族の役割を演じて行う演習のことをいう。

家族インタビュー：カルガリー家族看護モデルにおいて看護師が患者、家族に対し行うインタビューのことである。導入、アセスメント、介入、終結の4段階がある。

## III 研究目的

1. 看護師に対するカルガリー家族看護モデルを用いた家族インタビューのロールプレイ演習の効果を明らかにする。

## IV 研究方法

- 1 対象：研究に同意が得られた、F病院における家族看護勉強会に参加を希望した看護師 35名と、実際に1回以上ロールプレイ演習に参加した看護師 13名。

- 2 研究期間：平成15年4月～平成16年3月まで

- 3 ロールプレイ演習の進め方

テーマに沿って、毎月家族インタビューの実際をロールプレイ演習する。グループごとに演習を行う。演習後各グループでふりかえりの時間を持ち、演じていた時に感じた感想や、演じた意図等を意見交換する。

#### 4 勉強会のプログラム

	プログラム
平成15年6月	妻の介護負担を持つ87歳の末期腎不全HD患者の発熱を主訴にした緊急入院の事例で病歴聴取のロールプレイ演習
7月	母親が児を呼んだために児が車道を横断。車と接触し交通事故で骨折した小児科の事例をもとに病歴聴取のロールプレイ演習
8月	VTR（家族システム看護の質問の実際・家族システム看護の介入方法）観賞
9月	末期胃がん患者と家族の事例でCFAMを用いてアセスメントの実際をロールプレイ演習
10月	肝癌終末期の家族の事例でCFAMを用いてアセスメントの実際をロールプレイ演習
11月	肥大型心筋症の母親と娘の事例（急性期）でCFAMを用いてアセスメントの実際をロールプレイ演習
平成16年1月	11月の事例を用いて、CFIMを用いて家族への介入計画を立案しロールプレイ演習
2月	事例に対して家族の苦悩の表出について介入計画検討

#### 5 調査方法

##### 1) 質問紙調査法

##### (1) 前後アンケート

ロールプレイ演習を行う前（平成15年5月）とロールプレイ演習後（平成16年2月）に看護師の認識を聞いた自作の質問紙を配布し、前は即時回収、後は留置法にて1週間後に回収した。

##### (2) 振り返りアンケート

ロールプレイ演習後に毎回ロールプレイ演習後の学びや感想を振り返り用紙を用い、自由記載後即時回収した。

#### 6 調査内容

##### 1) 前後アンケート

- ① 看護師の自己の家族インタビューを行う技術に対する認識
- ② 看護師が家族インタビューで難しいと感じる点
- ③ 看護師のCFAM、CFIMの理解に対する認識
- ④ 看護師のCFAM、CFIMの活用に対する認識
- ⑤ CFAM、CFIMの実際の活用の仕方
- ⑥ 看護師の家族とのかかわりに対する必要性の認識
- ⑦ 看護師の家族とのかかわりに対する意欲

①③④⑥⑦に関しては、非常にそう思うから非常にそう思わないまでを7段階の評定尺度を用いて点数配分した。

②⑤に関しては該当する項目に複数回答してもらった。

## 2) 振り返りアンケート

### ①ロールプレイ演習後の学びや感想

7 分析方法：質問紙法によるロールプレイ演習前と後の看護師の認識の変化に対し分散分析を行い比較した。統計処理はSPSS (Ver. 12.0) を使用した。

ロールプレイ演習後のふりかえり用紙の感想に記述されている内容に対し、演習の効果を表す内容について類似するものをカテゴリー化し看護師の認識の変化と比較分析した。

## V 結果

### 1 アンケート回収率

演習前アンケート 35名配布 25名回収 (回収率 71%)

演習後アンケート 13名配布 8名回収 (回収率 62%)

ロールプレイ演習後振り返り用紙回収 35枚 (ロールプレイ演習参加者延べ人数 17名)

### 2 演習に参加した看護師の認識の変化

1) 看護師の家族インタビューを行う技術に対する認識と家族インタビューで難しいと感じる点

インタビュー技術について、看護師は演習後、家族インタビュー技術が高まったと認識していた。又、演習後、看護師は、相手の伝えようとする言葉の意味を正確に捉えることが難しいと感じていた。

表1：看護師の家族インタビューを行う技術に対する認識の変化

質問項目	演習前	演習後	F値
1. 家族インタビュー技術の向上に対する認識	3.13	4.63*	9.529

有意差 \* = P < 0.05

表2：家族インタビューを行う技術で難しいと感じる割合の変化

質問項目	演習前	演習後	F値
1. 感じよく自己紹介をしてインタビューの目的を伝える	44%	13%	0.259
2. 立ち入った質問であっても必要だとすることを聞く技術	48%	88%	0.857
3. 相手の思考や感情の流れにそって話を聞くこと	28%	25%	.000
4. 沈黙も大事にし、相手の思考のペースを大事にする	36%	38%	.043
5. 相手の伝えようとする意味を出来るだけ正確に捉えること	36%	88%*	5.637
6. 相手がどのように感じているか理解すること	0%	38%	.000

有意差 \* = P < 0.05

2) 看護師のCFAM、CFIMの理解と活用に対する認識と実際の活用の変化

演習後、看護師のCFAM、CFIMに対する理解は、深まる傾向にはあったが有意差はみられなかった。しかし、看護師はCFAM、CFIMが活用できるようになったと認識していた。さらに、演習後、CFAM、CFIMの活用について、患者を家族も含めてみようとしているという回答が増えていた。

表3：看護師のCFAM、CFIMに対する認識の変化

質問項目	演習前	演習後	F値
3. CFAM、CFIMの理解に対する認識	3.60	4.88	3.973
4. CFAM、CFIMの活用に対する認識	2.42	4.50**	13.569

有意差\*\* =  $P < 0.01$

表4：看護師がどのようにCFAM、CFIMを活用しているか

質問項目	演習前	演習後	F値
1. 全く活用していない	44%	8%	5.905
2. 患者を家族も含めてみようとしている	48%	100%**	8.141
3. 病歴をとる時にCFAMの視点を意識して情報をとっている	28%	38%	0.245
4. CFAMの視点に基づいた情報収集を実際行っている	8%	13%	0.140
5. 家族とかわる必要性を感じたときに、CFIMの介入技法を参考にしている	36%	63%	1.728
6. 実際に家族への介入をCFIMの介入技法を実践している	0%	0%	

有意差\*\* =  $P < 0.01$

3) 看護師の家族とのかかわりに対する認識と意欲の変化

演習前後で看護師の家族とのかかわりの必要性に対する認識には変化がなかったが、家族とかわろうとする意欲は高まっていた。

表5：看護師の家族とのかかわりに対する認識の変化

質問項目	演習前	演習後	F値
1. 家族とのかかわりの必要性に対する認識	6.44	6.78	.653
2. 家族とかわろうとする意欲	4.64	6.38**	19.084

有意差\*\* =  $P < 0.01$

4) 振り返りアンケート

看護師の感想は大きく分けてカルガリー家族看護モデルに関する感想とロールプレイに関する感想とに分けられた。カルガリー家族看護モデルに関する記述からはCFAMの家族を多角的に見る視点で事例を分析したことからの効果を表現したものが一番多く見られた。ロールプレイに関する記述からは、対応の幅の広がりや対象

理解につながったという効果が多く記述されていた。

表6：ロールプレイ演習後の振り返り用紙感想欄記述内容の分析

大項目	中項目	小項目	件数
カルガリー家族看護モデルに関する記述	CFAMに関する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族を多角的な視点で捉えて仮説を立案することの重要性に気づいた</li> <li>・初回インタビューの困難さ</li> <li>・家族の関係性を理解することの重要性</li> <li>・家族の危機的状況のときのインタビューの重要性に気づいた</li> <li>・アセスメントの視点に基づいた実際の質問の仕方が学びとなった。</li> <li>・家族の気持ちを受容、共感する重要性</li> </ul>	8 4 4 1 1 1
	CFIMに関する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・アセスメントしながら介入していくタイミングや実際の介入の方法が難しい</li> </ul>	1
ロールプレイに関する記述	対応の幅の広がりに関する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・他者の対応に対する気づきから自己を振り返り学びとなった</li> <li>・自分のインタビューをふり返る機会となった</li> <li>・いつも一人で悩んでいたが同じ悩みをもつ人からのアドバイスが心強かった。</li> </ul>	7 1 1
	対象理解に関する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・家族の感情が体験により理解出来そこからの学びがあった</li> </ul>	7
	演じることに関する記述	<ul style="list-style-type: none"> <li>・演じることに照れや緊張を感じた</li> <li>・もっと多くの役割を演じることで学びを深めたい</li> </ul>	5 1

## Ⅵ 考察

### 1. 看護師の家族インタビューを行う技術に対する認識の変化について

ロールプレイ演習に参加した看護師は自己の家族インタビューを行う技術が向上したと認識していた。しかし、家族にインタビューを行うとき難しいと感じる技術については、「相手が伝えようとすることを正確に捉えること」をより難しいと感じているということ以外、変化が見られなかった。アンケートでは、インタビューを行うとき難しいと感じる技術について、コミュニケーションスキルとしてのインタビュー技術を問う内容を設問項目としていた。演習に参加した看護師は自己のコミュニケーションスキルとしてのインタビュー技術に対する認識には大きな変化はないが、家族インタビューを行う技術は向上したと認識していたといえる。その理由は、演習後の振り返りアンケートに記述されている内容から推察できる。「家族を多角的な視点でとらえて仮説を立案することの重要性に気づいた」という感想が多かったことから、看護師は、CFAMの家族を理解する多角的な視点がロールプレイ演習をとおして理解できたということが考えられ

る。CFAMの多角的な視点をもって、仮説をもとに意図的な質問をしていく過程を体験的に学べたことが看護師の自己の家族インタビュー技術の向上という認識に結びついた部分である。さらに「家族の関係性を理解することの重要性」という意見がふりかえりアンケートにあがっていることから、看護師は、家族を理解するために必要な影響を与え合う人間関係に注目するという円環的視点を学ぶことができたといえる。カルガリー家族看護モデルを用いて演習を行うことは、システムとしての家族を理解するために必要な視点を理解し、具体的な質問へと発展させていく過程に効果があるということが明らかとなった。

又、対応の幅の広がりや対象理解という点にも効果があるという事が、振り返りアンケートの「他者の対応に対する気づきから自己を振り返り学びとなった」「家族の感情が体験により理解できそこからの学びがあった」という感想が多かったことから考えられる。演習に参加した看護師は他者を観察することから自己の対応の幅を広げ、家族の立場を体験することにより他者への理解を深めることができたと思われる。特に、家族を看護の対象としてとらえるときに、家族は家族員それぞれ異なる感情を持ちながら、お互いに影響しあっているということを理解することは重要である。家族員それぞれを演じた後にどのように感じたか、振り返りをもつことで確認できるロールプレイ演習はシステムとしての家族を理解するために有効な方法であった。

## 2. 看護師のCFAM、CFIMに対する認識の変化について

演習に参加した看護師はCFAM、CFIMに対する理解が深まる傾向にはあるが、有意差はなかった。今回の演習では、ロールプレイを中心に行いCFAMの枠組みに立ち返る機会があったが、理論全体の学習については不足していた。この点がCFAM,CFIMの理解が十分深められなかったという結果に影響していると思われる。しかし、看護師は演習によりCFAM、CFIMの活用は出来るようになったと認識していた。演習による看護師の自己の家族インタビュー技術に対する認識の変化が、CFAM、CFIMの活用につながったものと思われる。実際の看護師のCFAM、CFIM活用の仕方については、演習後、患者を家族も含めてみていると答えた看護師が有意に増加していたことから、患者と家族を一つのシステムとしてみるCFAMの視点が演習に参加した看護師に浸透したことを裏付ける。しかし、介入にCFIMの介入技法を実践していると答えた看護師は演習後においても変化はなく、介入段階のインタビュー技術に対しては、十分な効果は確認できなかった。今回のロールプレイ演習では、看護師の介入にどのように家族が変化するのかをまで確認することが難しかった。今後、CFIMの介入技法としての家族インタビュー技術に対して学びを深めることと、実際の事例に介入しその結果を検討していくプロセスが必要であると思われる。

## 3. 看護師の家族とのかかわりに対する認識の変化について

ロールプレイ演習前後で看護師の家族とのかかわりの必要性に対する認識に変化はみられなかった。調査は自由参加の家族看護勉強会に参加を希望した対象に行った。調査を行った看護師の家族とのかかわりの必要性に対する認識は演習参加前から高かったと思われる。しかし、看護師の家族とのかかわりに対する意欲はロールプレイ演習後、高まっていた。その理由としては、ロールプレイ演習が、看護師の家族インタビュー技術を高め、家族とかかわる上で躊躇する理由として挙げられていた技術が不足である、具体的方法がわからないといった問題を解決する事ができた為だと思われる。又、ロールプレイ演習の方法として、困難な家族の事例に対するアプローチを演習参加者で共に体験し、検討したことも、看護師の家族とのかかわりに対する意欲を高めることに効果があったと思われる。川野<sup>5)</sup>はロールプレイングによる体験の共有は、演習参加者の学習集団としての凝集性を高めるといっている。ふりかえりにより学びは深められ、演習参加者同士のメンバーシップが自然に生まれた。結果、演習に参加した看護師は、困難だと思われる家族へのかかわりに対しても意欲を持つことが出来るようになったのではないかと考える。

## Ⅶ 結論

本研究により以下のことが明らかになった。

1. ロールプレイ演習は、システムとしての家族を理解するために必要な視点を理解し、仮説をもとに具体的な質問へと発展させていく過程に効果があり、看護師は自己の家族インタビュー技術が向上したと認識していた。
2. ロールプレイ演習は、看護師のCFAM・CFIMに対する理解を深める傾向にあり、活用へと発展させる効果がみられた。
3. ロールプレイ演習は、看護師の家族に関わろうとする意欲を向上させた。

## Ⅷ おわりに

研究の結果から看護師に対するカルガリー家族看護モデルを用いたロールプレイ演習の効果が看護師の家族インタビュー技術の向上に効果があることが示唆された。しかし、研究の対象数が少なく、特に、演習前と後の対象数にも差があることから、この結果を一般化するには至っていない。今回の課題も踏まえて看護師の家族看護の実践力を高めていくことができるような試みを今後も検討していきたい。尚、本研究の概要は日本家族看護学会第11回学術集会で発表した。

## 引用文献

- 1) 森山美知子 家族看護のためのロールプレイの実際 月刊ナーシング Vol. 22 No13 2002 11 pp.24-45
- 2) 草柳かほる他 患者の視点にたったロールプレイングの学習効果 日本看護学会論文集 32 回看護教育 2002. 01 pp.182-184
- 3) 基礎看護学実習中のロールプレイ演習の効果 学生が話しを「聴く」ための教育 日本看護学会論文集32回看護教育 2002. 01 pp.125-127
- 4) 川野雅資 患者一看護婦関係とロールプレイング p.78 日本看護協会出版

## 参考文献

- 1) 森山美知子 ファミリーナーシングプラクティス 家族看護の理論と実践 医学書院 2001
- 2) 中野照代 飯田澄美子 藤生君江 大学院研究科における家族支援の力量形成に関する教育とその効果 家族看護第一巻1号 pp.145-151
- 3) 下田美和 佐藤昭枝 黒田久美子 院内集合教育「家族看護コース」受講経験の維持家族看護第一巻1号 pp.152-157
- 4) 内田照彦・増田公男 要説 発達・学習・教育臨床の心理学 北大路書房 pp.124-130
- 5) 鈴木和子 渡辺裕子 家族看護学理論と実践 日本看護協会出版 2000